

## ソルブの民話(二)

パウル・ネド 編  
大野 寿子 訳

### 第一章 動物メルヒェン(続き)

#### 一〇(A) 四匹の楽師(要旨のみ)

ロバとイヌとネコとオンドリが老齡ゆえに追いつかれ、いっしょに連れ立って森へ行き、楽師として世にできることを決意する。森の中で日が暮れて、オンドリが一筋の灯りを見つける。四匹は灯りのともった一軒の家を発見する。その中では泥棒たちが夕食をとっている。動物たちは鳴き声をあげて泥棒たちを追い払い、泥棒の家を手に入れる。夜になり、偵察に送り込まれた泥棒をロバが殴る。イヌは泥棒の足を噛み、ネコは泥棒の顔を引っ掻き、オンドリは鳴き声で泥棒を震え上がらせる。それ以来泥棒た

ちは、再び家へと戻る気力を喪失し、その家は最終的に四匹の楽師たちのものとなる。

〔ラウジッツ人―娯楽と教訓のための雑誌〕、一八六六年、第七四号より。〕

#### 一〇(B) 追い出された者たち

ある父親が、だらしなくて忘れ者の息子を追い出した。息子は自らの糧を求めて見知らぬ土地へと赴くしかなかった。息子がある村を通りかかったとき、村の一番端の家の前、扉の側にいた一匹のイヌがこう尋ねた。

「あなたはどこへ行くのですか？」  
すると追い出された者がこう答えた。

「僕は自分の糧を求めて世界中をまわらなければならないのさ。だって父さんから追い出されちゃったんだからね。」  
するとイヌがこう言った。

「私も似たようなものですよ。私はまだ若くてびんびんしていた頃には、ご主人様にそれはもう忠実に誠実にお使えしたものですがね。今となっては老いぼれて、昔のようにはいきません。というわけで、もう餌にもありつけずひどい状況ですよ。私も是非ごいっしょさせていだいて、自分の糧は自分で探したいもんですね。」

こうして両者は意気投合し道連れとなった。

息子とイヌは別の村へとやって来て、一匹のネコを見つけた。そのネコは垣根の側に、とても悲しそうに座っていた。一人と一匹はネコに挨拶をし、ネコは自分の苦境を嘆いた。まだ若くて、自分の奉公が出来た頃にはうまくいっていたのだが、今となってはネコも年を取り、ひどい境遇になってしまっていたのだ。ネコも彼等に意気投合し、もつとい糧を探す道連れとなった。

さて、三者は先へと進み、最初から数えると四番目となるある村で、一匹のロバに出会った。ロバもまた同じようにひどい状況で、同じように道連れとなった。それからまた彼等は、同じようにひどい境遇のオンドリと出会い、オンドリもまた道連れとなった。

一人と四匹は先へと進み、夕方遅くにある大きな森へとやって来た。寒くてたまらないのだが、自分たちの休む宿が見つからなかった。追い出された息子がこう言った。

「僕たちの中で、木の一番高いところまで登って、近くの村や灯りを見ることのできるのは誰だろう？」

「私ならまあ辛うじて登れますね」と言ったネコが見張りに遣わされ、木の上からこう叫んだ。

「灯りが見えるよ。」

ネコが木から降りると、灯りに向かって皆で歩き、一軒の泥棒の家へとたどり着いた。その家には誰もおらず、ただ灯りだけがついていた。皆は中へと入り、ご馳走だらけのテーブルを見つけ、本当に腹い

っぱい食べた。それから一人と四匹は眠くなった。だが、いったいどこで寝ろというのか？ 追い出された息子が、この仲間たちのリーダーとなつており、こう言った。

「家でそれぞれがねぐらとしていたところで、めいめい眠ればいいじゃないか。僕は家ではいつもベッドで寝ていたね。」

イヌはこう言った。

「私はいつもテーブルの下で寝ていましたね。」

ネコがこう言った。

「私はいつも暖炉の前のベンチで寝ていましたね。」

ロバがこう言った。

「私はいつも扉の陰で寝ていましたね。」

そしてオンドリがこう言った。

「私はいつも煙突のつぺんで見張りをしたものでしたね。」

そして全員が眠りについた。

夜になると泥棒たちが家に帰ってきて、誰かよそ者が家に住み着いていることに気付いた。しかし怖さのあまり、誰も家に入ってみようとはしなかった。

## 一一 キツネの中に男の子が一人

昔あるところに一人の楽師がおり、薄暗い森の側の小さな家に住んでいた。悲しい時の喜びと慰めだったのは一人息子であり、彼はその息子を溺愛していた。彼とその妻は非常に熱心に息子を教育し、できる限りすべてのことを息子にしてやった。それでもピントラシユク——男の子はそういう名であった——は、不運から逃れることができなかったのである。

ある日、母親は森へ行き、父親は演奏のためにレストランへ行つた。森の中のそう深くないところにキツネの穴がある。大変な寒さの中、その穴に住む四匹のキツネは充分な餌を見つけることができず、もう何日もひもじい思いをしていた。そこへ小さなピントラシユクが母親を探しに家の外へ、そして森へとやって来た。普段なら絶対に人間を襲わないキツネたちだが、この日は牙を研ぎ、遠くの方からピントラシユクめがけて駆けて来た。かわいそう

いや、とうとう泥棒の頭が家へと入つた。というのも彼はお金をテーブルの上に置きっぱなしにしたからだ。しかし彼がテーブルの側に近寄つたとき、テーブルの下のイヌが目を覚まし、彼に飛びかかった。すると泥棒は灯りをつけようと思い、マツチの置いてあるベンチへと歩み寄つた。するとネコが安眠を妨害され、泥棒の顔を引つ掻いた。さて泥棒は怖くてたまらなくなり、外へ出ようと扉のところへ行こうとした。すると扉の陰で寝ていたロバが安眠を妨害され、腹を立てて泥棒に襲いかかり、泥棒を壁から壁へと投げつけた。

「ミーハ、ヒーハ」と泥棒は続けざまに叫んだ。それを聞いて煙突の上のオンドリが目を覚まし、鳴き始めた。もう朝の四時をまわつていたので。

「コケリクー！」

泥棒はこう思った。

「悪魔よ、来るなら来い。」

そして一目散に逃げていった。

〔W・フォン・シューレンブルク』伝説、風俗、習慣に表れる  
ヴェントの民族性』、二三頁より〕

な子供は、何もわからずちよこちよこ歩きまわつていた。そして次の瞬間、キツネが子供を深い穴へと引きずり込んだ。四匹のキツネに逃げ道を閉ざされ、ピントラシユクは恐怖のあまり震え泣いた。

それからすぐに父親が家の様子を見に帰宅し、かわい子供がどこにもいないことに気付き愕然とした。しかしながら彼は、キツネが追い込まれると、子供を連れ去ることが時々あるということを聞いていたので、悲しみながらもすぐさまバイオリンと重い棍棒を手に持ち、キツネの穴へと向かった。楽師は楽器を奏で、深い穴の中の聴衆を虜にしただけでなく、音楽にあわせて物悲しくひたむきな声でこう歌つた。

さあチンツェリン、

私のバイオリン！

穴の中にはキツネが四匹、

そして私のピントラシユク！

キツネたちは、こんなに美しく奏で歌うのはいった

い誰だろうと考えた。一匹のキツネがこう言った。  
「お姉さん、私が見てくるわ。」

楽師は、キツネが好奇心旺盛だと知っていたので、穴の入口の脇に構えていた。キツネがそと近づいてきて、穴から外をのぞいたとき、楽師の棍棒がキツネを殴った。プリス、プラス！

それから楽師はまたバイオリンを弾いた。

さあチンツエリン、

私のバイオリン！

穴の中にはキツネが三匹、

そして私のピントラシユク！

穴に残ったキツネたちは、仲間が戻ってくるのが遅すぎると思っていた。

「あの子はきつと外がとても気に入ったのよ」と三匹は話した。

「きつとそこで楽しい音楽にあわせて、誰も彼も皆ダンスをしているんだわ。お姉さん、行つて確かめてきてよ。そして私たちに教えてよ。」

好奇心旺盛なキツネが行つて、顔をのぞかせたとき、楽師がキツネの頭を打った。プリス、プラス！  
それから楽師は一層力強く奏で歌った。

さあチンツエリン、

私のバイオリン！

穴の中にはキツネが二匹、

そして私のピントラシユク！

キツネが二匹とも戻つて来ないので、残された二匹のキツネはこう思った。

「二人とも一緒に戻つてこないなんて、よっぽどお気に召したのね。私たちも二人の跡を追いましよよ。」

二匹はウキウキと急ぎ、外を見まわした。プリス、プラス！プリス、プラス！棍棒で強打された二匹は出血多量で死んでしまった。父親は喜び、穴の中に向かつて叫んだ。

「ピントラシユク。私のかわいい息子。出ておいで！」

ピントラシユクはそれを聞き、暗闇の中から日の光の中へと急いで這い出た。キツネの手から解放され、父親の腕の中で憩ったとき、ピントラシユクの喜びはどんな大きかったことか。それから長いこと彼は、両親や他の人たちに、この危険なかくれんぼについて何度も話して聞かせた。ピントラシユクが大きく変わったとき父親は、叩き殺したキツネから、モシヤモシヤした毛皮のコートを仕立ててやった。その毛皮がピントラシユクを今でも暖め続けていることだろう。

〔週刊新聞のための月次付録、一八六二年、第五六号より。〕

## 一二 年寄りクマと若いクマ

昔、年寄りのクマと若いクマが日向ぼっこをして体を暖めていた。若いクマが言った。

「お父さん、この地上で一番強のは誰ですか？」

「息子よ、それは人間だ。人間がこの地上で一番強いんだ。」

それを聞いて若いクマが言った。

「人間の誰かと是非お知り合いになりたいな。そして力比べをしてみたいな。ねえ、一度その人間とやらを見せてくださいよ。」

年寄りクマが言った。

「おいで。あそこの通りの側に腰掛けよう。あそこならきつとすぐに人間を見ることができる。」

二匹がしばらく通りの側の木陰に座っていると、小さな子供が一人、通りに沿つてやってきた。若いクマは尋ねた。

「あれが人間ですか？」

「いや、あれはこれから人間になるんだ。」

年寄りクマはこう答えた。

しばらくして、おじいさんが一人通りかかった。

若いクマはすぐさま尋ねた。

「あれが人間ですか？」

「いや、あれは人間だったんだ。」

年寄りクマはこう答えた。

しばらくして兵士が一人やつて来た。若いクマは再び尋ねた。

「今度こそ、あれが人間ですか？」

「そうだ。」

父親のクマが答えた。

「お父さん、行って力比べをしてもいいですか？」

「ああ、いいとも、行っておいで！」

若いクマはすぐさま兵士のところへ行つた。若いクマが息を切らして父親のところへ走って帰り来るまで、そう長くはかからなかつた。

「で、どうだったのだ？」と父親は息子に尋ねた。

「どうもこうもないですよ。僕があいつのところへ行つたら、あいつは何か筒のようなものをつかんで、僕の顔につばを吐きかけたんだ。僕は目の前が真っ暗になって、毛皮がトロトロに煮え始めた。それからあいつは料理用のかき混ぜ匙を取り出して、僕の耳のあたりを仰いだんだ。毛という毛が僕の周りをビュンビュン飛んで、とうとう僕は寒くて寒くてたまらなくなつたんだ！」

（『ラウジッツ人―娯楽と教訓のための雑誌』、一八六一年、第五六号より。）

### 一三（A） 年寄りキツネのお話

しまった。そして今こそおまえさんが改心する時なんだよ。だからもうこれ以上罪を犯してはならない。謙虚な人生をおくつておくれ。ニワトリやアヒルやガチヨウはおまえさんのためにあるのではないのだよ。」

謙虚な人生なんてキツネにはひどく面倒に思われた。しかしそれでもキツネは、この約束を固く守りぬこうと誓い、他人のことには見向きもせず己の道を歩んだ。しばらくの間はキツネもこの約束を守っていたが、すぐに彼のお腹がひどく悲鳴をあげ始めた。というのも、ニワトリの肉の方がネズミの肉よりも断然おいしいからである。そしてとうとうキツネは、もう一度泥棒をする決意をした。人間から捕まらない方法をキツネは思案し、修道僧が身に付けているようなフード付きの長いマントをあつらえた。行く道すがらキツネは熱心に地面を見つめ、曲がり角や垣根のところで時おり祈りを捧げた。その姿が、人間やニワトリの目にとまるようにするためである。他のキツネたちが彼に近寄つてくると、彼は、ニワトリの肉を食べることがいかに大きな罪で

昔、一匹の年寄りキツネが自分の穴の中で寝ていた。そしてこう思った。自分は生きているあいだに、ガチヨウやアヒルやニワトリを襲つて農夫に多大な被害を与え、それゆえいつも大きなお仕置きを受けてきた。ところが人間というものはある時期が来たら改心し、自分の罪を悔い改めるものらしい。そのようなことをキツネは聞いていたので自分もそうしたい思い、近くの村へいった。村には牧師がいて、自分の庭を散歩していた。その牧師のもとへとキツネは近寄り、神についての話をし、自分の願いを語つた。牧師は、農夫と同じように自分のニワトリの身を案じていたのでとても喜んだ。善意を持つて懺悔すれば、すべての罪が許されるだろうとキツネを慰めた。それから牧師とキツネは、大きなカシの木の下に腰を下ろした。そこで牧師は、キツネの心の中にあるおぞましい罪のことを聞いた。それはそれは少ないなんてものではなかつた。牧師が言った。

「おまえさんは自分の人生をととても無駄に過ごして

あるかを説いた。日に二度、キツネは村の外れの小さな茂みの中へと行き、そこで懺悔をし、絶えることなく祈りを捧げた。

このような振る舞いの甲斐あつて、ニワトリたちはこのキツネを信用するようになり、そのことを他の鳥たちとも話していた。キツネは、ニワトリたちをこう諫めた。庭の地面をカリカリ掻いて、人間たちに多くの被害を与えてはならない。今がめられたことに不満をもつべきではない。そして、庭の隅にはなく、きちんとした巢の中に卵を産むべきである。ニワトリたちは、自分たちが毎日罪を犯していたことを知り、今、何をなすべきかをキツネに問うた。キツネはこう答えた。

「悔い改めなさい。そして熱心に祈りなさい。一番いいのは、私のこの茂みの中で祈ることです。メンドリさん、一度にはなく一羽ずつここにいらつしやい。祈ることはいかなることなのかを、私がじっくり教えてさし上げましょう。」

そしてこのことは通りのことが起こつた。キツネはもううれしくてたまらなかつた。というのも彼

はあの日以来、毎日一羽ずつメンドリを食べることができたからだ。

こんな殺しを繰り返していたある日、牧師がキツネに出会いこう尋ねた。

「君が私に約束した改心とはこれだというのか！」キツネはこう答えた。

「牧師さん、どうか落ち着いてください。他人のいうことをなんでも鵜呑みにしちゃいけないことをどうか分つてくださいな。誰だって、面を合わせりゃ猫なで声を出し、陰で牙をむくものですよ。」

（『ラウジツツ―娯楽と教訓のための月刊誌』、一八九二年、三八号より。）

### 一三(B) キツネとグレーハウンド

年のせいで自分で獲物を仕留めることが出来なくなった年寄りキツネが、猟犬のグレーハウンドをそのかした。飼い主から逃げだし、森に移り住み、自分といっしょに狩りに行くよう説得したのだ。この猟犬はほんとうにお人よしだった。キツネといっ

しよに喜んで森へと駆けた。二匹が森に入った。キツネは、ヤマウズラの雛を数羽押し込んでいた石の山のところまで来るとこう言った。

「グレーハウンドくん、こちらで朝ご飯を食べるといふのはどうだろう？」

「まだ何も捕まえちゃいないのに、何を食べると言うんだい？」とグレーハウンドはぶつぶつ言った。

「まあまあ、足長のグレーハウンドくん、その草の中にでも横になつて待つていてくれよ。」

そしてキツネは、例のヤマウズラを猟犬にところに持つてきた。二匹は羽を筆取り黙々と平らげた。

食べながらキツネは、グレーハウンドの狩猟の際の手際よさと、かつての飼い主から今は自由の身であるといふことを褒め称えた。それがいかに素晴らしい人生であるか、充分には語り尽くせないほどだった。

グレーハウンドは口の周りをペロペロと舐め、興味深げに聞いていた。これを機会にキツネは、両方ともどんなときにもお互いを見捨てないでおこうといふ固い約束を、グレーハウンドと無理やり結んだ。

お昼ごろになつて二匹は、森の獣を捕まえるためにそれぞれ別の方向へと進んだ。しかしながらキツネはそんなに遠くへは行かず、最初に見つけた茂みの下に寝そべり、夕方近くまで眠りこけた。それからキツネは、足を引きずりながら石の山のところへと戻つてきた。そこではグレーハウンドが、もう長いことキツネを待つていた。グレーハウンドは太つた野ウサギを捕まえており、キツネが足を引きずりながらやつて来たときこう尋ねた。

「キツネくん、一体何を捕まえたんだ？」

ところがキツネはというと、自分の足を何度が持ち上げ、痛さのあまり唾を呑み込みこう答えた。

「何も捕まえてないんだ。日利きのグレーハウンドくん。僕はヤマウズラを数羽狙つていたんだ。君の口にとても合つたようだったからね。だから僕はジャガイモ畑の陰で待ち伏せしてたんだ。でも、ヤマウズラに襲いかかろうとしたときに、サンザシの棘が足に刺さつてしまつて、ヤマウズラを取り逃がしてしまつたんだ。ほら、足を引きずつてるだろう。とつても痛いんだ。」

「かわいそうに。」とイヌが悲しげに言った。

「ほんとだよ。こんな目にあつたことなんてなかつたよ。これで僕は、天気がいい日も一日中家にいなきやいけないんだ。そして養生しなきゃいけないんだ。ねえ、約束してくれただろう。僕の食べ物、倒を見てくれるだろう。ほら。もうとにかく辛くて、歩くこともできないよ。」

「だつたら君の足が治るまで家で留守番してなよ。」とグレーハウンドが言った。

「君一人の面倒くらい、いやもう一人増えたつて面倒見てあげるよ。森にはお肉なんて嫌と言うほどあるんだからね。」

それからキツネは石の山に長いこと横になり、眠つたりダラダラしたりしていた。キツネがとにかく満腹になつて横になつたとき、自分の足がもう痛まず治つたらしいといふことをグレーハウンドに告げた。

「よかつた。君がすっかり治つてほんとうによかつた。」と猟犬はホツとして言った。

「また狩りができるようになつて本当によかつた。」

しかし、最初の狩りでこのように味を占めたキツネは次の狩りでも同じように振舞ったので、とうとうグレーハウンドはキツネの言うことを信用しなくなってしまう、こう言った。

「キツネくん。僕と一緒に来るんだ。僕はいつも何か獲物を仕留めてきているじゃないか。」

「もちろんさ。行こう。いっしょに行こうじゃないか。」キツネはこう答えたが、密かに腹を立てていた。

それから二匹は並んで森の奥深くへと入っていった。二匹が藪の中から空き地へとなんとか抜け出したとき、キツネの傍らから一匹のウサギが飛び出した。

「見て見て、グレーハウンドくん。奴を追っかけてよ。こつちがジャガイモ畑だ。あつちにはサンザシがある」とキツネは叫んだ。まもなくグレーハウンドはウサギを捕まえ、家まで担いで帰るようキツネに頼んだ。イヌは再びひとり狩りへと出かけた。

グレーハウンドが家に戻ってきたとき、キツネはとても具合が悪いと嘆いた。

えに他の歯も何本か取れてしまった。イヌはキツネのために、骨からやわらかい肉を引きちぎり、皮をはいで食べさせてやった。そうこうしているうちに秋が近まり、狩猟シーズンとなった。キツネの病気のために、グレーハウンドが喜んで狩りをした美しい日々は、瞬く間に幕を綴じた。というのも別の猟犬が、森をうろろしているグレーハウンドを見つけ、巢の中のキツネを捕まえ飼い主のところへ持ちかえってしまったからである。キツネは食べられ、皮をはがれた。猟師は、逃げ出した自分のグレーハウンドを捕まえて家に連れて帰り、鎖でつないだ。それからというものグレーハウンドは、毎日散々殴られ、脱脂乳をぬったパンしかもらえなくなってしまうた。

(『ラウジツツ』娯楽と教訓のための月刊誌、一八九〇年、九五号より。)

### 【パウル・ネドによる注釈】

#### 一〇 四匹の楽師

「いったい何が起こったんだ？」

「ああ、僕が家に戻ってきたとき、腰に刺すような痛みが走ったんだ。そしてほら見てくれよ。僕はほんのひとくち肉をつまみ食いしようとしただけなんだよ。なのに歯が二本折れてしまったんだ。」

「かわいそうに」とグレーハウンドは言った。

「もうたぶん治ることはないかもね。」

「我慢してくれ、兄弟」とキツネが答えた。

「すべてのものには終わりがあるものさ。僕たちが健康に気をつけて、冬の通り過ぎるのをじっと待てば、歯もまた生えてくるさ。そして僕は元気で健康になる。そうすれば今度は君のために狩りをする。そしたら君は家で横になっていればいいのさ。明日の天気なんて誰にもわからないさ。」

「悪くないね」とグレーハウンドは言った。

「もしも病気になったらそうするさ。僕は自分の意志でここにいる。僕たち二人は互いを見捨てることはいらないのさ。」

夏の間中ずっとキツネは、このように病気で横になっていた。キツネはこの二本の歯を失い、老齢ゆ

テキストAは、国境のバード・ムスカウ(Bird Muskan) 辺りの方言で、ヴァルコが書き留めたものである。この話のすべての本質的特徴は、KH M (グリム・メルヒエン) 第二七番「ブレイメンの音楽隊」に従った形となっている。しかしながらこのテキストが、方言、しかも低地ソルブ地方のムスカウ方言で書き留められた数少ないソルブ・メルヒエンの一つであるため、私はあえてここに記した。このテキストは、H・ヨルダンにより加筆を施され、彼の『最も美しい民話集』六三頁に高地ソルブ語で収められている。(ここでの訳出は、ドイツ語要旨のみ。)

ニーダーラウジツツ(低地ラウジツツ)より採録されたテキストBにはいくつかの特色がある。最初の部分、つまり、だんだんと増えていく仲間の最初の一人が、追い出された農夫の息子(人間)であるというところが独特である。このテキストは、ポルテノポリーフカ『グリム・メルヒエン注釈書』第一巻、二五一頁に注記されている。

仲間のリーダーとしての男（人間）の存在は、ポイケルト「シュレージエン地方のドイツ・メルヒエン」二〇頁、第一六番「動物を率いる男」でも裏付けられる。ポイケルト前掲書一八頁、第一五番「家畜と泥棒」は、もともとはオンドリーニワトリ・モティーフから来ているまた別のテキストである。農夫にさんざん打たれた下僕が、雄ウシ、雄ヒツジ、ザリガニ、雄ネコ、オンドリのリーダーとして王国を築くという、クービンの『グラーツのお話』第一卷、一八頁、第一五番のテキストは、ポーランド伝承文学の中でも我々ソルブの型（タイプ）である。クジヤノフスキー『体系的に配置されたポーランド民話』の第一卷六三頁には、三三の資料が挙がっており、その中の四つの話が、男（の子）をリーダーとしてしている。

A・アールネの「旅をする動物たち」参照のこと（FFC第一号）。K・クローン『メルヒエン研究の諸成果概観』（FFC第九号）、三一頁以降にも報告されている。

存在しない。フルニクのその後の多くの学術研究の信憑性に関しては、非の打ち所が無い。しかしながらここでは、彼がこの物語を複数のメルヒエン素材から自分で作り上げたのではないか、もしくはそのような創作を悪意なしに借用したのではないかという、当然の疑問が生じてしまう。

この物語の根底には、バイオリン演奏の力というモティーフがある。我々はこのモティーフを多くの物語より知ることができる。それには、ボルテノポリーフカ『注釈書』第二卷、四九〇頁、KHM第一〇番「上手な狩人」に関する注釈を参照せよ。とりわけ、「オオカミの巣穴の中の男」についての次のような物語が指摘される。あるバイオリン弾きが夜帰宅する途中、オオカミの巣穴の中へと入り込む。その穴の中には一匹のオオカミがおり、バイオリン弾きを食べようとする。彼は一晚バイオリンを演奏してオオカミを虜にし続ける。夜が明けてようやく彼は、森林官に救出される。森林官はオオカミを撃ち殺す（『ラウジッツ人』娯楽と教訓のための雑誌』、一八六七年、第一二四号、ヨルダンの六

## 一一 キツネの中に男の子が一人

キツネたちの中に男の子が一人いるというこのメルヒエンは、M・フルニクが学生のときに、雑誌『ソルブの花』、一八五三／四四年号に掲載したものである。その際、「民衆の中で書き留められた」という注記が添えられていた。フルニクはこの話を、自分の著である『チタンカ』にも採録した。『週刊新聞のための月次付録』、一八五八年、第四号にこれが最初に印刷された。シェフチクの二頁にこの話が綴られており、ナウカが自分の収集の第一番目にこの話を持ってきている。『ソルブの花』の一九〇〇／〇一年号には、この話がもう一度再話されている。今日ではこのメルヒエンは、最も有名で最も愛されているソルブ童話のひとつとなっている。

この物語は根本的には、メルヒエンらしい特徴をほとんど持ち合わせていない。ことばは民衆的ではなく、非常にセンチメンタルな描写なので、メルヒエンらしくないのである。また、男の子の名前がめずらしく、説明がつかない。このバリエーションは

九頁、「オオカミの巣穴に入ったバイオリン弾き」。類似の話は次のふたつである。P・クンツェンドルフ『州の伝説』、フランデンブルク、四〇頁、第二七番「オオカミの巣穴に入ったバクパイプ吹き」。W・シュヴァルツ『マルク・フランデンブルクの伝説と昔話』、一八九五年、三二頁、第一五番「バクパイプ吹きとオオカミ」。このタイプのスロヴァキアのテキストは、ポリーフカ『スロヴァキアの民話集』第五卷、一三二頁参照のこと。最もよく似たものはやはり、金の鶏冠のオンドリというロシアの民話である。（トルストイ『ロシアの民話』ベルリン、一九四九年、四九頁。）そのテキストによると、雄ネコ、ツグミ、オンドリがいっしょに住んでいる。雄ネコとツグミの留守中に、キツネがオンドリを騙して自分の巣穴へと連れ込む。雄ネコとツグミは金の鶏冠のオンドリをキツネの横暴から救出する。その際に雄ネコが、キツネの穴の前でロシア琴（ryc II）を奏でてキツネを穴からおびき出したのである。一九世紀半ば頃のザクセン地方の学校読本に、「オオカミの中に子供が一人」というタイトルのリ

ーゼンゲビルゲ（巨人山地）の物語が頻出すること  
を最後に挙げておく。例えば、『学校と家庭のため  
のドイツ読本』、ライプツィヒ、一八六四年、九六  
頁を参照のこと。

## 一二 年寄りクマと若いクマ

我々ソルブのこのテキストは、クラールによつて  
書き留められた。クマの代わりにオオカミが登場す  
る、自由に語られたテキストに関しては、M・ナウ  
カ『伝説とメルヒエンと物語―ソルブ民族の宝物』  
第一号、一七頁、第一四番と、ヨルダン『最も美し  
いメルヒエン集』、一〇頁、「オオカミが人間と知り  
合う」を参照のこと。

このメルヒエンのモテーフ構成は、KHM第七  
二番「オオカミと人間」と似ている。ソルブのバリ  
エーションは収められてはいないものの、ボルテノ  
ポリーフカ『グリム・メルヒエン注釈書』第二巻、  
九六頁をも参照のこと。

隣接する地域からは、この話のバリエーションは

報告されていない。スロヴァキアのメルヒエン（ポ  
リーフカ『スロヴァキアの民話集』第五巻、一二三  
頁）にも、クマとオオカミが同じように登場してい  
る。またクジジャンノフスキー『体系的に配置された  
ポーランド民話』第一巻、六七頁には、ドイツのヴ  
ァージョンともソルブのともかなり異なる、ポーラ  
ンドの一四のテキストが掲載されている。

## 一三（A） 年寄りキツネのお話

寓話を想起させる結末となる、笑話（シユヴァン  
ク）風のこのメルヒエンは、もともと、アルトド  
ーベルン（Alt Döben）の話であり、低地ソルブ語  
で語られたものである。

## 一三（B） キツネとグレーハウンド

このメルヒエンはA・ザイラーが、一八二八年に、  
手書きの『ソルブ新聞』に掲載したものであり、民  
衆が語り伝えているものを彼自身が採録したという

覚書が添えられている（学術雑誌『マチツァ・セル  
ブスカ』、一九三二年、第三八号において、O・ヴ  
イチャスレーマンがそう報告している）。実はE  
・ムツケが、『ラウジッツ―娯楽と教訓のための月  
刊誌』、一八九〇年、第九五号に、ザイラーの遺稿  
をもとにしてこのメルヒエンを掲載していたのだ  
が、O・ヴィイチャスレーマンはその資料を見過ご  
していたと思われる。というのも彼は、学術雑誌『マ  
チツァ・セルブスカ』一九三二年第三八号に寄稿し  
た論文「ソルブ・ロマン派誕生の地としてのライプ  
ツィヒ」の中で、このメルヒエンを、手書きの『ソ  
ルブ新聞』から初めて活字化したものとして掲載し  
ているからである。このメルヒエンで用いられるこ  
とはの形式は、まぎれもなくザイラーの手によるも  
のであることを指し示している。

テキストAもテキストBも両方とも、「年老いて  
いくキツネ」のモテーフに由来しているもので、こ  
こで双方を総括する。この両方のテキストの類例が、  
ソルブ文学にも近隣の伝承文学にも見当たらない。  
また、この類話は、アールネ／トンブソンの話型（タ

イプ）カタログにも収められてはいない。従つてこ  
の二つの話の民話としての信憑性に、大きな疑念が  
沸きあがるのである。この二つのメルヒエンは、情  
報提供者たちが自由に複製したものでないか。私  
にはどうしてもそう思えるのである。そのようなこ  
とはザイラーにとつてはめずらしいことではなかつ  
た。というのも彼は、自分の収集したメルヒエンや  
寓話において、多くのメルヒエン・モテーフを自  
由に改作しているからである。この話のテキストA  
では特に、見てくれだけの信心深さというパロディ  
ーが際立っている。「歌つて祈るキツネ」に関して  
は、ボルテノポリーフカ『注釈書』第二巻、二〇七  
頁を参照のこと。この両方のテキストは恐らく、腹  
黒く狡猾で食い意地の張った、本当はそんなに年老  
いてはいないはずのよく知られたキツネのモテーフ  
が、自由に改作されたものではないだろうか。

### 【使用テキスト】

Paul Nedo (Pawet Nedo): Sorbische Volksmärchen -  
Systematische Quellenangabe mit Einführung und



Anmerkungen. Budyšin-Bautzen (Domowina Verlag) 1956.

パウル・ネド『ソルブ民話―概説と注釈を施した体系的文献一覽』、ドモヴィナ出版社(パウツェン)、一九五六年。

パウル・ネド『ソルブ民話―概説と注釈を施した体系的文献一覽』に収録されているメルヒエン全八六話中、動物メルヒエンに属する第一〇話から第一三話まで(八一・九五頁)の翻訳を試み、「ソルブの民話(一)」「東ドイツ文学」第四号、一九九八年、五・四四頁)の続編とした。本稿より表記を改め、「メルヘン」を「メルヒエン」とする。また、『パウル・ネドによる注釈』(テキスト三六五・三六七頁)の和訳の際に、略語等のわかりづらい箇所には補足説明を施した。地方に関しては、ドイツ語名の後、カッコ内にソルブ語名を記す。

#### 【主要参考文献】

Časopis Mácicy Serbskeje [Zeitschrift der „Mácica

Serbska“ = „Sorbsche Mutter“]. Budyšin-Bautzen 1848-1937.

學術雑誌『マチツマ・セルブスカ』、パウツェン(フディシン)、一八四八・一九三七年。

Luzičan, Časopis za zabawu a powučenje [Der Lausitzer. Zeitschrift für Unterhaltung und Belehrung]. Budyšin-Bautzen 1860-81.

『ラウジッツ人―娯楽と教訓のための雑誌』、パウツェン(フディシン)、一八六〇・八一年。

Luziča, časopis za zabawu a powučenje [Die Lausitz. Monatschrift für Unterhaltung und Belehrung]. Budyšin-Bautzen 1882-1937.

『ラウジッツ―娯楽と教訓のための月刊誌』、パウツェン(フディシン)、一八八二・一九三七年。Měsacny Přidawk [Monatsbeilage zur Wochenzeitung]. 1858-59.

『週刊新聞のための月次付録』、一八五八・五九年。

Serska Nowina [Sorbsche Zeitung]. (Handschriftlich). Leipzig 1826-32.

『ソルブ新聞』(手書き)、ライプツィヒ、一八二六・三二年。

A. Aarne / S. Thompson: The Types of the Folktales. (FFC. 74). Helsinki 1928.

A・アールネ／S・トンプソン『民話の語型(タイプ)』FCFの第廿四号、ヘルシンキ、一九二八年。

J. Bolte / G. Polivka: Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm. 5 Bde. Leipzig 1913-32.

J・ボルテ／G・ポリーフカ『グリム兄弟『子供と家庭のためのメルヒエン集』注釈書』全五巻、ライプツィヒ、一九一三・三二年。

Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. 2 Bde. Göttingen 1857.

グリム兄弟『子供と家庭のためのメルヒエン集』全二巻(第七版)、ゲッティンゲン、一八五七年。

H. Jordan: Najrjše Judowe bajki. 1. zešiwk [Die schönsten Volksmärchen. 1. Heft]. Wojerecy-Hoyerswerda 1876.

H・ヨルダン『最も美しいメルヒエン集』、ホイースヴェルダ(ヴォイェルツィ)、一八七六年。J. Krzyżanowski: Polska bajka ludowa w układzie systematycznym [Das polnische Volksmärchen in systematischer Anordnung]. 1. Bd. Bajka zwierzęca (Das Tiernärchen) Warszawa 1947; 2. Bd. Baśń magiczna (Das Zaubernärchen) Warszawa 1947.

J・クジジャンフスキー『体系的に配置されたポーランド民話』、第一巻「動物メルヒエン」、ワルシャワ、一九四七年。第二巻「魔法メルヒエン」、ワルシャワ、一九四七年。

M. Nawka: Bajki a basnički. Serbske narodne. 1. zešiwk [Sagen, Märchen und Erzählungen. Sorbisches Volksgut 1. Heft]. Budyšin-Bautzen 1914.

M・ナウカ『伝説とメルヒエンと物語―ソルブ民族の宝物』第一号、パウツェン(フディシン)、一九一四年。

W.-E. Peuckert: Schlesiens deutsche Märchen. In: Schlesisches Volkstum. Bd. 4. Breslau 1932.

W・E・ポイケルト『シレジーエン地方の

イツ・メルヒエン」、『シュレージエンの民俗』  
第四卷、ブレスラウ、一九三二年。

J. Polivka: Súpis slovenských rozprávok [Sammlung der  
slowakischen Volksmärchen]. 5 Bde. T. Sv. Martin  
1923-1931.

J・ポリーフカ『スロヴァキアの民話集』全5  
巻、マルティン、一九二三-三二年。

W. v. Schulenburg: Wendisches Volkstum in Sage,  
Brauch und Sitte. Berlin 1882.

W・フォン・シューレンブルク『伝説、風俗、  
習慣に表れるヴェントの民族性』、ベルリン、一  
八八二年。